発達理論の学び舎

Back Number: Vol 170

Website:「発達理論の学び舎」

© YOHEI KATO 2018

目次

3381. ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たち(その1)

3382. ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たち(その2)

3383. 民宿に宿泊する夢

3384. 時空間を超える曲について

3385. ヘルムホルツ及び英文執筆に関する新たな学び

3386. 充実感の中で終える日曜日

3387. カミキリムシと化学のテキストに関する印象的な夢

3388. ゴミ収集車に関する夢

3389. 就寝前の研究アイデアと巨大なものとのつながり

3390. ロシアの作曲家ニコライ・メトネルとの出会い

3391. 本日の作曲実践と読書

3392. オンラインアプリーケションの完成に向けて

3393. 太陽が見え始めた頃に

3394. 夜空に浮かぶ三日月を眺めながら

3395. 今朝方の夢

3396. 今朝方の夢の続き

3397. シュタイナー教育における芸術実践およびエマニュエル・シャブリエ

3398. 夕方の絶景:GDPと精神病理

3399. クルーズ客船と列車に乗る夢

3400. 夢の振り返りと今日の活動計画

3381. ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たち(その1)

午前中に雷の音が聞こえ、雨が激しく降るかと思っていたら、そうではなく、小雨がぱらつく程度だった。時刻は午後の三時半を迎え、今は全く雨が降っておらず、灰色の雲が空を覆っているだけだ。

午前中と午後の時間を使って、ウィルバーの“The Eye of Spirit: An Integral Vision for a World Gone Slightly Mad (2001)”の二読目を行っていた。本書の中には、ウィルバーの芸術論が二章に渡って紹介されており、それらの箇所については再び読み返すことになるだろう。その他の章を読みながら、いくつか考えさせられることがあった。主なものとしては、ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たちに関する問題だ。

過去に何人かの知人から、とりわけ日本の教育者、ないしは教育学を研究する学者の中に、ピアジェの発達理論を頭ごなしに否定する人たちがいることを聞いていた。その批判の仕方について話を聞いてみると、随分と浅薄なものであることに驚かされた。彼らの発想が持つ問題は多岐に渡るが、先ほど考えていたことをいくつか列挙しておきたい。最たるものとしては、「発達段階」という言葉が示す階層的な概念を相当に毛嫌いしていることが伺え、同時に彼らは「階層」という概念をとても狭く認識しているようだ。

ウィルバーが指摘しているように、階層という概念が持つ意味は大きく分けて二つあり、一つは発達可能性としての階層であり、もう一つは支配的な意味での階層である。前者に関しては、私たちのリアリティはホロン(全体と部分の入れ子構造)で構成されているという考え方のもと、原子や分子などの物質のみならず、私たちの知性にもホロン階層があり、私たちが発達を遂げていくというのはまさにそうしたホロン階層を上がっていくことであり、ここでは階層そのものが発達の可能性として捉えることができる。

ホロン階層については重要な特徴がいくつかあるが、詳細はウィルバーの書籍に書かれているため、ここではそれらを取り上げることをしないが、つまり一つ目の意味の中には、一般的に「階層(ヒエラルキー)」という言葉が暗に示すような、上位のホロンが下位のホロンを抑圧するというような意味はない。ウィルバーも明示的に、私たちの発達はヒエラルキーではなく、ホラーキー(holarchy)であると述べている。

一方で、「階層」という言葉には、支配的な意味も確かに存在している。これは、発達構造を誤って捉えたものであり、下位のホロンの価値を蔑ろにする形で、上位のホロンの優位性のみを強調する考え方として階層を捉えたものである。おそらく、ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たちは、ホロンとしての発達構造の特性を認識しておらず、一般的に「階層」という言葉に内包されている支配的な意味に過剰な反応を示しているのではないかと思う。

ウィルバーも指摘しているが、「階層」ないし「レベル」という言葉を極度に嫌う人たちは、「階層やレベルという考え方は断固として認められない」というレベル付けが自らの主張の中に含まれていることに盲目的である。つまりここでは、「レベルというものは認められない」という自己の主張が、「レベルというものが存在する」という主張よりも優位なものであると暗黙的にみなしながら、レベルという考え方を抹消しようとするのである。ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たちは、どうもそうした自己矛盾的な思考に陥っており、発達の持つホロン特性を良く理解していないのではないかと思われる。
フローニンゲン：2018/11/10（土）15:50

3382. ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たち（その2）

今日は早朝に、久しぶりにショパンに範を求めて作曲をした。ここのところは古典派の作曲家の曲を参考にする毎日であったから、ショパンの曲を参考にすることは良い気分転換になった。さらには、当然ながら古典派の曲にはない音楽的観点をショパンの曲が提供してくれることも有益であった。今日はこれから、バッハの変奏曲に範を求め、その後にハーモニーに関する書籍を読んでいこうと思う。

先ほど、ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たちの発想について日記に書き留めていた。正直なところ、彼らの発想については書き留めておくべきことがかなり多く、どこから手をつけていいのか迷うほどである。

今年の春にアムステルダムで開催されたジャン・ピアジェ国際学会に参加した時、そこには日本人研究者は誰もいなかったように思う。この学会は、ピアジェの理論を研究している者たちが集まるというよりも、現在は、発達心理学の研究を行っている学者たちが集まる学会になっているのだが、そこで最新の研究成果を発表する者、あるいはそうした発表を聴く者の中に日本人の姿が見えなかったことをふと思い出す。

物理的に日本からアムステルダムまで距離があるのはわかるが、同様の距離を持つ国からも研究者たちが集まっていたことを考えると、どうも日本の発達心理学のコミュニティは内向きのような気がしてならない。

ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たちの話を知人から聞いてみると、端的には、そうした批判をする人たちがピアジェの理論および最新の発達心理学の研究に関して非常に無知であることに驚かされる。以前聞いた話だと、ある学者がピアジェの発達理論を批判する際に採用していた唯一の論点が、今から40年ぐらい前に行われた、ピアジェの研究成果に対する反証実験だったことに驚かされた。

確かに、その反証実験では、ピアジェが提唱する論理数学的な知性は、年齢によって発達のばらつきがあり、タスクを変えると、これまで発揮できていた能力が発揮できなくなってしまうことなどが明らかにされていた。その反証実験を受けて、ピアジェ自身も理論を見直すことを行い、さらにはピアジェの死後において、ジュアン・パスカル=レオンやロビー・ケース、さらにはカート・フィッシャーを始めとした「新ピアジェ派」の研究者たちが、「発達段階」の持つ性質を丹念に調査していくという試みが行われ、その試みは「新・新ピアジェ派」と評していいだろう現在の研究者たちにも引き継がれ、発達段階の特性については現在も様々な調査が続いている。

ピアジェの発達理論を頭ごなしに批判する人は、新・新ピアジェ派の研究成果はおろか、新ピアジェ派の研究成果について何も知らないことに驚かされる。そうした批判をする人は往々にして学者であるにもかかわらず、彼らの知識は40年前の研究成果で止まってしまっているようだ。

もう一つ、これはむしろ私が知りたいと思っていることなのだが、日本の学者や教育者の中で、ピアジェの発達理論を毛嫌いする人は、それに代わる何かしらの理論を盲信しているのではないかと思い、それが何なのかを知りたいと思う。彼らが「ピアジェの発達理論」と聞くだけで身震いする様子は、どこか他の宗教を毛嫌いする際の反応と瓜二つであり、いったい彼らはどのような他の理論を信奉しているのかを非常に気になる。

さらには、そうした宗教的盲信と相まって、ピアジェの理論を根底から批判する人たちは、自己の何かしらのシャドーを投影しているように思えて仕方ない。特に、「階層」や「レベル」という言葉に過剰

に反応する様子を見ていると、それらに対する何かしらのコンプレックス（例：学歴コンプレックス、幼少時代に親や権威から抑圧された体験など）が彼らの中にあるのではないかと思う。そうしたものがなければ、あれほどの過剰反応を示すことはないと思うのだ。

要約すると、ピアジェの発達理論を毛嫌いする人たちは、「発達段階」という言葉が持つ意味を狭く――あるいは誤って――捉えており、過去のピアジェの発達モデルの何が否定され、何が否定されずに残り、そしていかように発達研究が進展していったかの知識が欠落している。

また、そうした批判をする人たちは、往々にして、発達心理学に関する最新の文献のみならず、ピアジェの発達理論に関する原著を一冊も読んでいないことがあり、そこでなされる批判はどこか「私はこの宗教を信じているから、あの宗教は嫌い（実際には、彼らは自分が信奉している宗教にすら気づけていないのだから、それよりもタチが悪いのだが）」という次元に留まるように思える。

不勉強かつ未熟な知性を持つ人間が権威の立場に立つというのは、学術の世界だけではなく、政治や経済の世界においても同様だと思うが、この問題は本当になんとかならないものだろうか。ただでさえ儒教的な発想の枠組みが根強く残っているわが国だけに、そうした人間が権威を持っているという状況はとても暗澹たる気分にさせられる。フローニンゲン：2018/11/10（土）16:18

3383. 民宿に宿泊する夢

今朝は五時半に起床し、六時から一日の活動を始めた。辺りは闇と静寂に包まれている。今日が日曜日だからか、この時間はとりわけ静かだ。ここ数日に引き続き、今朝方も夢を見ていた。ただし、記憶が非常に曖昧になっており、夢の内容を具体的に思い出すことは難しい。そのようなことを思っていると、少しばかり夢の内容を思い出すことができた。夢の中で私は、日本のどこかの県の民宿に宿泊していた。その周りは自然が豊かであり、特にその場所は山に囲まれていた。

またその民宿は、どうやら大学のサークルの合宿などでよく使われることがあるようだ。大学時代の友人二人と私はそこに宿泊することになった。民宿に到着すると、どうやらこれからサッカーの練習をすることになっているらしいことがわかった。私たちよりも先に民宿に到着したメンバーは、すでにグラウンドに出ており、これからすぐに練習が始まるようだ。

私は練習が始まる前に風呂に入ろうと思い、風呂場に向かった。するとそこで私の体は小さくなり、幼少時代の記憶が思い出され、父と一緒に風呂に入っていた時の記憶が蘇ってきた。しばらくその記憶の中にいた後に我に返ってみると、私の体は元の大きさに戻っており、浴槽からも上がっていた。タオルで体を拭いていると、高校時代の体育の教師が廊下にいることに気づいた。

その教師は今回の合宿に同行しているらしく、私たちを監督する役割を担っているようだ。自分だけが先に風呂に入っていることを知られるのはまずいかもしれないと思っていたが、その教師は私の存在に気付かず、玄関に向かって廊下を歩いて行った。

風呂から上がると、サッカーの練習をするという意識は私の中になく、ご飯を食べようと思った。食堂らしき場所に向かってみると、そこには一緒にこの民宿に来た二人の友人がいた。彼らと一緒にご飯を食べ終わった時、それが次の日の朝食だったことに気づいた。昨日に到着してから朝までの記憶はなく、朝食を摂り終えると、友人が宿の管理人に宿代を払おうとしていた。

この宿の管理人は大学生のバイトが勤めており、彼曰く、一泊当たりの宿泊料金は215円とのことであった。あまりに安い金額に私は驚いた。

そのような夢を今朝方見ていたことを思い出す。実際には、その他にも夢を見ていたことを覚えているが、それらの具体的な内容を思い出すことができない。また、上述の夢に関しても、車で民宿に向かっている最中の窓からの景色などを断片的に覚えている。さらには、民宿が所有しているテニスコートとプールはかなりの大きさをを持っていたことも覚えている。天気は晴れであり、山の木々が緑色に輝いていたことを思い出す。

ひるがえってフローニンゲンの今日は、どうやら午前中から午後まで雨が降るらしい。幸いにも、本日中の食料はすでに購入済みであり、買い物に出かける必要はない。ただし、明日の分の食料はなく、明日は今日よりも強い雨が降るらしいので、今日の午後か夕方にでも、近所のスーパーに買い物に出かけるかもしれない。フローニンゲン：2018/11/11（日）06:26

No.1402: Profound Dreams

I had a couple of profound dreams last night. After getting up, I wrote down them.

I'm aware that some symbols in the dreams still have a strong influence on my psyche.

Groningen, 08:37, Monday, 11/12/2018

3384. 時空間を超える曲について

今朝方に見ていた夢について振り返ったところで、今日の活動予定について書き留めておく。今日はこれから、早朝の習慣である作曲実践を行う。

昨日、ハーモニーに関する書籍を読んでいた時に、確かに作曲理論を学んでいくことは、観点を獲得する上で重要だが、それ以上に実践の方が大切であるという思いを強くしていた。実は、書籍から学べる作曲理論は、作曲実践から直接的に学ぶことができるのではないかと思っていた。

さらには、書籍を通じて得られる知的理解よりも、実践を通じて得られた身体的理解の方が遥かに重要であるように思えたのである。スポーツにせよ、プログラミングの技術にせよ、はたまた外国語の習得にせよ、具体的な技術を要求される分野において、その分野の専門書を読むよりも、実践を通じて絶えず内省をしていくことの方が、技術を磨いていく上でカギを握るのではないかと改めて思っていた。

もちろんこれからも作曲理論に関する書籍を読んでいくだろうが、それを行うのは時間があるときに書籍を眺める程度に留め、兎にも角にも実践を最優先させていこうと思う。そうした実践の都度、新たな発見や気づきを得るように意識し、それを内省対象として学習を継続していく。

今日は昨日に引き続き、早朝の作曲実践において、バッハではなく、ショパンに範を求めようと思う。これまで毎日バッハの四声のコラールを参考にしていたが、少しばかり気分転換として、何日間かはショパンの曲を参考にしてみようと思う。

読書、作曲、日記の執筆などを行き来することが一つの調和を生み出しているように、参考にする作曲家を色々と行き来することは、自分の内側の音楽空間に調和をもたらしているようだ。今日の午後には、バッハの変奏曲に範を求めて作曲する。

昨日にふと、近々、曲の進行を鏡に映したように、AからB地点までの曲の動きをそっくりそのまま逆にして、BからAに戻っていくかのような曲を作ってみようと思った。不思議なことに、これを行うと、楽譜の二次元上においては、確かに曲が逆進行に動いているのだが、三次元上の音楽空間においては、一つの時の流れのように継続した曲の進行になる。

最初私は、時間を逆に巻き戻したいと思っていたのだが、仮にそれを意図して鏡のように曲を作ったとしても、時間の不可逆性を乗り越えることは難しいことがわかった。だが、体感として時間が逆に戻ったかのように感じられる曲を作ることができたら、それは非常に面白いと思った。今書斎の中に流れているバッハの曲のように、いくつかの曲は、私たちの意識下において時空間を超越させてしまう力を持っていることを考えると、あながち時間を逆方向に進行させるような感覚を引き起こす曲を考えることもおかしなことではないのかもしれない。

カリフォルニアのベイエリアに住んでいた頃を含め、過去に何度か、意識が時空間を超えていく体験をしたことがあることを思い出すと、意識のそうした性質を用いれば、時空間を超えていく作用を引き起こす曲を作っていくことができるかもしれない。そうした観点からバッハの曲を参考にしていくのは面白いだろう。

また、時空間をワープしていく際にカギを握るのは、意識の性質のみならず、記憶という脳内現象でもあるため、記憶についても今後は学習を深め、そこで得られた発見事項を作曲に活用してみたいと思う。その際の学習のポイントは、記憶の想起、記憶の創造、記憶の合成及び改変などになるだろうか。フローニンゲン:2018/11/11(日)06:50

No.1403: A Swamp's Greeting

Clouds in the sky look as if they were walking around a swamp. I'll start my afternoon reading.
Groningen, 15:08, Monday, 11/12/2018

3385. ヘルムホルツ及び英文執筆に関する新たな学び

起床してからしばらくすると、雨が降り始め、今もまだ小雨が降り続いている。先ほど書斎の窓を開け、空気の入れ替えをしたところ、冷たい風が部屋の中に流れ込んできた。しばらく窓を開けたまま

にし、つい今しがた窓を閉めた。早朝、ショパンの曲に範を求めて作曲実践を行った。その際に、短い曲を大量に作っていくことの意義を再度確認した。

毎日短い日記をいくつか書くことによって、言葉を生み出す回路が自分の脳と精神の中に育まれているのを実感する。それと同様に、とにかく膨大な短い曲を作っていくことによって、音楽的な回路を開いていく。楽想のようなものが溢れ出てくるためには、まずはそうした回路を開く必要がある。それに向けて毎日短い曲をいくつも作っていくことの大切さを改めて思う。

前々から直感的に、一万曲をまずは作ってみることを考えていたが、それぐらいの数を作れば、おそらく何かしらの回路が開かれるのではないかと期待する。ただし、それが実現されるためには、一つ一つの曲を意識的に作り、絶えず一つ一つの曲に対して内省していくことが不可欠だ。絶えず意識的に曲を作り、実践の最中で得られる事柄を絶えず内省対象として取り上げていく。

ショパンの曲に範を求め後に、以前街の古書店Isisで購入した“Helmholtz: From Enlightenment to Neuroscience (2010)”を読み始め、先ほど初読を終えた。ヘルムホルツは、生理学から物理学まで幅広い仕事を残していったが、その中でも音楽に関する研究をしていることに今日初めて知った。また、ヘルムホルツ本人が音楽を愛しており、ピアノの演奏を生涯に渡って行っていたことも知り、その点に大変共感をした。本書の中で取り上げられているように、ヘルムホルツはゲーテの色彩理論を参考にしながら、音と色の関係についても考察を深めている。これは私のテーマの一つでもあるため、その箇所については今後もまた読み返すことになるだろう。

ヘルムホルツは、ワーグナーよりもモーツァルトやベートーヴェンの音楽を好んでいたという記述の後に、イタリアの色彩豊かなピアノ曲も好んでいたという記述を見かけた。「イタリアの色彩豊かなピアノ曲」という言葉を目にした時、自分の中で想起される曲があまりなかったため、早速調べてみたところ、いくつかイタリアの作曲家が作ったピアノ曲を見つけ、今それらを聴いている。

銀色の雨が降りしきる中、今日は一日中イタリアの土壌で生まれたピアノ曲を聴こうと思う。

昨夜、スコットランド人の友人であるカルムから、大学院へ提出する志望動機書のレビューが返ってきた。再来週の月曜日までにレビューをしてもらえればと思っていたのだが、カルムはドラフトを送った次の日にレビューをしてくれたようだ。早期にレビューをしてくれたことをとても有り難く思う。練り

に練った内容だけに、文章の意味に関して不明なところは一切なかったようだ。一方で、文法的な誤りをいくつか指摘してもらい、改めてこうしたミスが自分の書き言葉の英語の中で生じるのだと思った。

欧米で英語を使いながら生活をし始めて、今年が七年目になるが、英語を書くということは、日本語を書くことと同様に今後も精進をしていく必要がある。指摘された箇所を眺めてみると、単数複数形に関しては、やはり未だに可算名詞と不可算名詞を一瞬で見分けることができないことに気づかされる。

もちろん、日常頻繁に用いる不可算名詞についてはさすがにもう間違えることはないが、文脈によって可算名詞にも変化しうる不可算名詞が厄介であり、そうしたものについては今でも判断に迷う。日本語の能力を日々涵養していく必要があるのと同様に、英語に関しても文法感覚と語彙の感覚を継続して養っていく。

今回は、1500字の中で訂正された語彙や慣用句は四つ、冠詞や単数複数形に関する訂正は三箇所だった。一つ興味深かったのが、“everybody can engage in artistic activities without previous artistic experience and can deepen the quality of life through arts”という表現を私がしていたところ、カルムは“the quality of their life”という訂正をしていた。私は“everybody”は単数であり、仮に“of”の後に冠詞を入れるのであれば、“his or her”となるのではないかと思っていたが、よくよく自分で調べてみると、“their”で受けることもできるらしいことを知った。こうしたことは本当に感覚的なものであり、ネイティブでなければなかなか気づかない。“everybody”は確かに機能上は単数だが、意味上は複数であるため、そのような受け方ができるのだろうと理解した。

カルムに修正をしてもらった箇所を今後のライティングに活かしていこうと思う。今日は午後に、修正箇所をドラフトに反映し、今日をもって志望動機書を最終版にし、提出前に最後の確認をしようと思う。フローニンゲン：2018/11/11（日）10:43

3386. 充実感の中で終える日曜日

時刻は午後の八時を迎えた。今日は雨が降ったり止んだりを繰り返す日だった。

ちょうど午後に数時間ほど雨が降っていなかったので、そのタイミングで近所のスーパーに買い物に出かけた。ここ最近は、午後五時半を迎えると、真っ暗になるようになった。

午後の六時を過ぎた頃だっただろうか。ふと窓の外を眺めると、夜空に三日月が浮かんでいるのが見えた。今はもう、雨雲によって月が隠れてしまっている。街灯だけが灯っている外の世界を眺めながら、今日について振り返る。端的には、今日はとても充実した日曜日だったと思う。読書に関して言えば、ヘルムホルツに関する書籍を読み、久しぶりに、ジョン・エフ・ケネディ大学時代にお世話になっていたマーク・フォーマン博士の“A Guide to Integral Psychotherapy: Complexity, Integration, and Spirituality in Practice (2010)”を読んでいた。

本書は、フォーマン博士の博士論文が元になっているのだが、各発達段階の特徴を丁寧に解説しており、さらには、各々の段階の介入方法（治癒及び発達支援）についても詳しく解説されている。今日はとりわけ、現在日本でも知られるようになってきたスパイラルダイナミクスの用語で言えば、ティール、ターコイズ、インディゴのそれぞれの段階に関する説明を読み直していた。

ちょうど今月中に、ある協働者の方たちのために、そうした高度な段階の特性について学ぶ勉強会を開催することになっていたため、それらの段階について復習をしておこうと思っていたことも、本書を再読した理由である。明日も発達理論に関する何かしらの書籍を読もうと思う。

今日は数時間ほどかけて、新たな協働プロジェクトに向けた準備をしていた。幸いにも、一件ほど新しいプロジェクトが動き出すことになり、その内容についてこちらの方であれこれと考えをまとめるという作業を行っていた。随分と長いメールを執筆することになり、メール以外にも参考資料をこちらの方ですぐに作成した。これから始まる新たなプロジェクトを通して、新しい関係性の輪が広がっていくことが楽しみだ。

今日はこれ以上読書をすることをやめ、ヘンリー・デイヴィッド・ソローに関する書籍“Bird Relics: Grief and Vitalism in Thoreau (2016)”は明日から読み始めようと思う。その代わりに、残り三十分ぐらいをかけて、明日の早朝に行われる、他の協働プロジェクトに関するオンラインミーティングの準備をしたい。明日の朝にも時間をかけてミーティングの準備をしようと思う。今日は充実感を感じさ

せる日曜日であった。明日からの一週間も同様に、実り多い日々を過ごすことができるだろう。フローニンゲン:2018/11/11(日)20:25

3387. カミキリムシと化学のテキストに関する印象的な夢

今朝は六時前に起床し、六時過ぎから一日の活動を始めた。実は五時前に鳥の鳴き声によって一度目が覚めたが、実際の起床は六時前であった。今日から新たな週が始まり、再び新たな気持ちを持って今週の取り組みに従事していこうと思う。

今朝方はいくつか印象に残る夢を見ていた。一つ目の夢の中で私は、見覚えのある田舎町を歩いていた。すると目の前には、友人の父が歩いている姿が見えた。その背中を追いかけるようにして歩みを進めていると、友人の父が「こんにちは。今日はいい天気ですね」と初老の男性に声をかけた。

見るとその男性は、その友人の祖父であった。友人の父は自分の父に声をかけたにもかかわらず、随分とよそよそしい言い方だなと思っていると、私は友人の父に追いつき、友人の父は私に気づいた。すると、私を昼食に誘ってくれた。その場所から近くにある友人の家に着き、一階の食堂に案内してもらった。そこには友人もいて、昼食を待っているようだった。

今から昼食を食べようとした時に、突然、地面に一匹の小さなカミキリムシがいることに気づいた。私たちはそのカミキリムシを外に逃がしてあげようとしたのだが、なかなか捕まえることができない。私たちは皆、その場にかがみこみ、長く大きなテーブルの下に隠れているカミキリムシをなんとか捕まえようとした。すると突然、私は「あっ！」と声を上げた。というのも、その小さなカミキリムシとは比較にならないぐらいの巨大なカミキリムシが一匹、テーブルの下の奥に隠れていたからである。そのカミキリムシはおそらく40cmぐらいの大きさだったと思う。

背中が固い鎧のようなものに覆われており、想像するに、そのカミキリムシは人間の指を簡単に切り落としてしまうぐらいの力を持っているようだった。私たちはその巨大なカミキリムシを見て、相当に驚いたが、友人の父は勇敢にも、そのカミキリムシを撃退しようとした。友人の父の手には包丁があり、包丁を振り落としてカミキリムシの背中を攻撃した。だが、カミキリムシの背中は鋼鉄の鎧のような固さを持っていたから、勢いよく包丁を振り落としてみびくともしていないようだった。

そこで今度は友人が、父に代わってカミキリムシを撃退しよう乗り出し、殺虫剤のようなスプレーを使おうとした。スプレーをカミキリムシに勢いよくかけてみると、さすがのカミキリムシも動きが鈍くなり、少しずつ静かになった。それでもカミキリムシはまだ生きているようだった。その様子を眺めていると、夢の場面が変わった。結局その後、カミキリムシがどうなったのかは定かではない。

その次に見ていた夢の場面では、私は小綺麗なホテルのレクチャールームにいた。どうやら今から、化学の授業が始まるようだった。授業の前に私は、化学式が含まれた化学の問題を友人と一緒に解いていた。その問題がなかなか解けず、あれこれと考えていたところで化学の授業が始まった。授業を担当するのは、優しそうな初老の男性であり、その顔は見覚えがあった。どこかその面影は、高校時代の化学の先生ではなく数学の先生のようだった。

レクチャールームの教壇には余っているテキストが何冊か置いてあり、先ほどまで手元にあったはずの自分のテキストがなくなっていることに気づいた。そのため、私は席を立ち、教壇に向かっていき、一冊ほどテキストをもらった。

自分の席に戻ろうとしている最中に、一人の友人がテキストがないために困った表情を浮かべていたので、私は手に持っていたテキストを渡した。再び私はテキストがなくなってしまったので、再度教壇まで歩いてき、再び自分の席に戻った。ところが、今度はレクチャールームの後ろの方にいた中国人の女性もテキストがないようであり、私は手に持っているテキストを渡してあげた。そこで私はまたしても教壇に向かって歩いてき、テキストを一冊手に取った。

すでに授業が開始されていることもあって、温厚そうな先生もさすがに困った表情を浮かべていた。自分の分のテキストをようやく確保した私は、自分の席に戻るつもりだったのだが、テキストさえあれば授業に出る必要はないと思ったのか、レクチャールームの後ろから外に出て行こうとした。すると、レクチャールームの一番後ろに座っている男性が作曲の勉強をしていることに気づいた。机の上には楽譜が広げられており、なにやらローマ数字を用いてコード分析をしていた。

直感的に私は、その男性は作曲科に在籍している大学院生だとわかり、相当に作曲経験のある人間だとわかった。一方で、そうした作曲経験豊富な人でもコード分析をするのだと思いながら、私はレクチャールームを後にした。フローニンゲン：2018/11/12（月）06:37

No.1404: A Dark Night Candy

I'm feeling as if a dark night outside were a candy. It tells me that the taste of a dark night can be sweet. Groningen, 21:09, Monday, 11/12/2018

3388. ゴミ収集車に関する夢

今日は月曜日ということもあり、平日なのだが、六時半を過ぎたばかりのこの時間帯はとても静かだ。近くで小鳥が鳴く声が聞こえて来る。ちょうどその鳴き声は、今朝方五時前に目を覚ました時に聞こえてきたのと同じ鳴き声である。

昨日は一つの記念すべき日であった。というのも、私の小中学校時代の親友が結婚式を挙げたからだ。残念ながら私は、日本に一時帰国することができず、式に参加することはできなかった。結婚式の当日は、友人も自宅に戻ってくるのが遅くなるだろうと思ったので、式から一夜明けた今日の夜に、友人の自宅に贈り物が届く手配をしておいた。昨日はあえて何もメッセージを送らなかったのだが、今日のオランダ時間の昼にでも友人にメールをしておきたいと思う。

今朝方の夢について先ほど日記に書き留めていると、もう一つ別の夢を見ていたことを思い出した。小綺麗なホテルのレクチャールームを後にした後、そこに広がっていたのは地元の中でも比較的に栄えている辺りの光景だった。その辺りには歯科医などがあり、山を切り開いたためか、道には幾分起伏がある。その辺りの近くの公園の前を通り過ぎようとしていたところ、なにやら公園が盛り上がっていた。

見ると、公園に特設ステージが設けられており、そこで何かのショーが行われていた。私は特に急いでもいなかったため、好奇心の赴くままにショーが行なわれている特設ステージに近づいていった。すると、そこではダンスショーが行われていた。複数の男女が華やかな衣装に身を包んでおり、音楽に合わせて華麗なダンスを踊っていた。

よくよく彼らの顔を見ると、その中のほとんどは私の友人であった。それに気がついた瞬間に、公園の中に何台ものゴミ収集車がやってきた。それは普通のゴミ収集車ではなく、あまり見たことのない

作りになっていた。確かにゴミを入れる部分はあるのだが、そもそも車がトラックではなく、高級軽自動車だった。

およそ7台ぐらいのゴミ収集車が公園の中央に停車すると、先ほどまでダンスを踊っていた人たちが一斉にステージを降り、ゴミ収集車に飛び乗った。一台一台の収集車は二人乗りであったから、そこで私は初めて、ダンスを踊っていた人数が14人であることを知った。

どの収集車にも運転手がすでにおり、先ほどまでダンスを踊っていた人たちは、収集車の後ろに捕まる形でその場を後にしようとしていた。一様に彼らは、ステージ上で見せていた笑顔と同じ笑顔をこちらに振りまいている。

私は、彼らがこれからどこに向かっていくのか気になったため、自分も収集車の後ろに乗せてもらおうと考えた。すると幸運にも、14人いたはずのうちの一人がいなくなっており、収集車に乗せてもらうことができた。

収集車が動き出すと、4台は山を登って行く道へ進み、残りの3台は山を下っていく道を進み始めた。私は山を下っていく方の収集車に乗っていた。公園を出ですぐは、まだ道が平坦であり、私は後ろを振り返りながら、山を登って行く4台の収集車を眺めていた。私が乗った収集車の横には友人が乗っており、私たちはしばらく会話を楽しんでいた。

しばらくすると、見覚えのある光景がどんどんと広がってきて、そういえば私はこれから、友人の父である一人の歯科医の助手として働く仕事があることを思い出した。それを思い出した時、私は横に乗っている友人に別れを告げ、収集車から飛び降りた。

収集車から降りた場所は、友人の父が勤めている歯医者があるはずだったのだが、私の記憶違いか、どうも場所を間違えたようだった。ふと空を見上げると、燦然と輝く太陽の姿を見た。

今朝方はそのような夢を見ていた。小さなカミキリムシと巨大なカミキリムシが出現した夢、化学のテキストに関する夢、そしてゴミ収集車に関する夢。それらの夢に現れたシンボルが持つ意味については、日中もあれこれと考えを巡らせてみようと思う。フローニンゲン：2018/11/12（月）07:03

© YOHEI KATO 2018

No.1405: A Tail of a Heavenly Dragon

Thanks to a sufficient amount of sleep last night, my energy is fulfilled. I'll start my morning reading and prepare for the application to a graduate school in the afternoon. Groningen, 09:27, Tuesday, 11/13/2018

3389. 就寝前の研究アイデアと巨大なものとのつながり

闇に包まれた外の景色を眺めていると、昨夜の就寝前に、今後の研究に関していくつかのアイデアが生まれていたことを思い出した。アイデアが生まれた時に、それらを全て、ベッドの横に置いてあるメモ用紙に書き留めていた。今、改めてそのアイデアを見返している。暗闇の中でメモをしたため、解読が少し難しいが、一つ目は、シュタイナー教育の価値を多角的に研究していく内容だ。例えば、シュタイナー教育が持つ認識論的な価値、霊性的な価値、芸術的な価値など、いくつかの領域に分け、一つ一つの領域に対して論文を書いていくようなことを考えていた。

昨日もふと、シュタイナー教育が現代社会で放っているユニークさについて考えており、そうしたユニークさはどのような価値から生まれているのか、あるいは、どのような価値と結びついているのかを考えていた。シュタイナー教育を多角的に研究する際には、特にその思想体系に注目をしたいと思う。また、研究する観点については、上述のもの以外にも、多くの点を考えていきたいと思う。

もう一つメモをしていた内容は、現代社会の様々な国が行っている教育が持つ哲学体系を調査していくというものである。端的には、各国の教育はどのような教育思想に基づいているものなのかが知りたくなり、それは教育思想の内容面のみならず、構造的にどのような発達段階に依拠する思想なのかを知りたくなった。

これも一つの学術研究として進めたいと考えているが、少しばかり調査の規模が大きく、仮に取り掛かるとしたら本腰を入れて取り組む必要があるだろう。今の私は、様々な教育思想に関心があるだけではなく、それらの教育思想が依拠している構造特性にも関心があるようだ。そうした構造特性を発達理論の観点から分析していくだけではなく、様々な哲学領域の枠組みを活用しながら分析をしていきたいと思う。そのためには、数日前に購入した一連の哲学書が役に立つだろう。それ以外にも、過去に購入して一読済みの哲学書を再び紐解こうと思う。まずは様々な哲学上の概念や枠

組みに習熟し、その過程の中で、現代の教育上の課題にそれらの概念や枠組みを活用し、課題の根本原因を分析していく。今日もそうした取り組みを実現させるための読書を行っていこうと思う。

早朝の作曲実践を始める前に、ふと今朝方の夢が持つシンボルの意味について考えていた。それはとりわけ、カミキリムシに関するものである。巨大なカミキリムシが現れた時、友人の父は、包丁を用いてカミキリムシの背中を切り落とそうとした。しかし、それは失敗に終わった。

カミキリムシは、「髪切虫」と表記するらしいが、それは「髪」を切ることに由来しているのみならず、仮に「神」を切るという意味も含まれているとしたら、というようなことを考えていた。

夢の中のカミキリムシは、何かを切ろうとする様子は一切なく、一方で友人の父がそれを切ろうとしていたことも不思議だ。さらに不思議なのは、鋭利な包丁で切りつけても、その巨大なカミキリムシはびくともしなかったことである。切れないカミキリムシは、神と切れないことを示唆しているのではないか、とふと思った。そこには神との断ち切れぬつながりが存在しているように思えてきた。あの巨大なカミキリムシは、私たちの存在一つ一つが、何か巨大なものとつながっていることを教えてくれていたのではないだろうか。フローニンゲン：2018/11/12（月）07:28

No.1406: Adventure of Light Waves

A couple of birds are flying in the evening sky. Light waves are going to end their adventure today, and they are returning their home. They will have an adventure tomorrow, too. Groningen, 16:21, Tuesday, 11/13/2018

3390. ロシアの作曲家ニコライ・メトネルとの出会い

時刻は午後の四時半を迎えた。今は雨が止み、雨雲の姿も見えない。

夕方を迎えたにもかかわらず、再度今朝方の夢について振り返っていた。今朝方見ていた夢はどれも、意味深長なシンボルをいくつも含んでいたことを改めて思う。それらのシンボルが持つ意味について考えるだけでも、そうしたシンボルが自分の心に何かしらの作用を引き起こしていることに気づく。夢のシンボルが持つ精神的作用は本当に侮れない。

今日は午前中に、協働者の方たちとのオンラインミーティングがあり、その後、ヘンリー・デイヴィッド・ソローに関する書籍“Bird Relics: Grief and Vitalism in Thoreau (2016)”を読み始めた。ソローの世界観を理解する上で、本書は格好の手引書だと思う。これから夕食までの時間を使って、さらに続きを読み進めていく。夕食を迎えるまでには、本書の初読を終えることができればと思う。

夕食後には、久しぶりにフォーレに範を求めて作曲をしてみようと思う。先ほど、武満徹に関する和書を読み進めており、本文の中に、フォーレの音楽が持つ東洋的な性質について言及があった。その記述に触発される形で、フォーレの楽譜を先ほど本棚から引っ張り出してきた。

早朝に作曲実践をしている最中にふと、宇宙の音について思いを馳せていた。宇宙の音について調べてみると、NASAが宇宙空間に存在する電波を音に変換しているものが見つかった。それらについてはまだ聞いていないのだが、宇宙的な何かに共鳴するような音を自分の内側から生み出したいと思う。自分が生み出す音は、確かに自分という一人の人間が持つ固有の内面宇宙の音であることは間違いないが、そうした音をより意識的に生み出していきたい。宇宙の音に対して関心を持ったことだけではなく、今日はロシアの作曲家であるニコライ・メトネルとの出会いもあった。私は今日までこの作曲家について知らなかった。

先日アマゾンで購入した書籍の発送の連絡に関するメールの中に、メトネルの楽譜が紹介されており、それを通じてメトネルという作曲家と出会った。すぐにSpotifyを経由してメトネルのピアノ曲を調べ、五時間ほどのピアノ曲全集をダウンロードした。メトネルの曲を聴きながら、彼のみならず、ロシアの作曲家についても今後範を求めたいという気持ちになった。参考にしたいと思う作曲家が数多くいるというのは、本当に嬉しいことである。この先の道を歩く楽しみがそこにある。近いうちにメトネルのピアノ曲に関する楽譜を購入し、今後はぜひロシアにも足を運びたいと思う。これまでロシアとは縁がなかったが、音楽を通じて少しずつその縁が生まれ始めていることに気づく。フローニンゲン:2018/11/12(月)16:51

3391. 本日の作曲実践と読書

今朝は普段よりも遅く、午前七時に起床した。昨夜就寝するのがいつもより20分程度遅かっただけであることを考えると、今日の起床が遅かった要因はその他にあると言えるかもしれない。十分な睡

眠を取ったおかげもあり、今日の活動に向けた気力が高まっている。とはいえ、今日は少しばかりゆっくりと一日の活動に従事していきたいと思う。具体的には、まずはいつもと同じように、早朝に作曲実践を行う。その際には、バッハの四声のコラールに範を求める。昨夜フォーレの曲を参考にした際に、フォーレの曲が持つ独特な魅力をまたしても実感した。

今夜はテレマンに範を求めようと思うので、明日にでもまたフォーレの曲を参考にしたい。午後の作曲実践においては、バッハの変奏曲を参考にしたい。これは昨日から考えていたことであり、実際に午後の作曲の際にはバッハの変奏曲に範を求めていく。

複数の作曲家の曲に触れながら、徐々に自分なりの作曲語法を確立していく。バッハやテレマン、さらにはハイドンやモーツァルトを核にしながらも、より現代に近い作曲家にも範を求めていく。そうした作曲家の音楽を統合して、自分なりの曲を作ることができる日がやってくることを楽しみにしている。

創造活動のみならず、今日は探究活動についても前に進めていく。昨日には、久しぶりにスザンヌ・クック=グロイターの書籍“Postautonomous Ego Development: A Study of Its Nature and Measurement (1999)”や、ロバート・キーガンの“The evolving self (1982)”と“In Over Our Heads: The Mental Demands of Modern Life (1994)”を読み返した。それらの書籍の全てを読み返したわけではなく、いくつか自分の氣になる論点があったので、それらを調べるような感覚で、該当箇所を読み進めていった。今日も昨日の読書と同様に、まずは関心事項を明らかにし、それらを調べるような感覚で書籍を読み進めていきたい。

特に今日は、シュタイナー教育の思想に関して読書を進めていこうと思う。シュタイナー教育に関する書籍はすでに何冊かあり、それらは過去に一読済みであるから、今回の再読によってシュタイナー教育に関する理解が深まっていくだろう。

今月末から来月にかけて、イギリスのアマゾンに注文した芸術教育の哲学に関する書籍が届くだろう。それらが届くまでは、すでに読んだことのある書籍を、自分の関心テーマを深めていくために何度も繰り返し読んでいくようにする。

© YOHEI KATO 2018

どうやら昨夜の就寝中には雨が降っていたようであるが、今は雨が止んでいる。今日は曇りがちであるが、少しばかり晴れ間が顔を覗かせるかもしれない。本日分の食料はすでにあるので、今日は買い物に出かける必要はない。今日から来週にかけての天気予報を確認すると、今日は最高気温が12度であり、最低気温が7度であるから、比較的暖かい。一方で、今週末からは、最高気温が10度を下回り、最低気温に関しては2度前後になる。今週末からの気温を見てみると、いよいよ本格的にフローニンゲンの冬が始まることを実感する。フローニンゲン：2018/11/13（火）08:23

No.1407: Skips of an Evening Primrose

Today is now approaching the end. An image that an evening primrose is skipping came to my mind. Groningen, 20:35, Tuesday, 11/13/2018

3392. オンラインアプリーケションの完成に向けて

つい先ほど早朝の作曲実践を終えた。やはり今朝は十分な睡眠を取ったおかげもあり、今日一日の活動に向けた気力がみなぎっているように感じる。

これから午前中の読書に取り掛かり、午後は大学院への出願に向けた準備をしていこうと思う。午前中の読書に関しては、作曲家の武満徹に関する書籍『音楽創造への旅』を読み進めていく。今日は久しぶりに、和書を読むことに多くの時間を使いたいと思う。午後からは、ゆったりとした気分の中で、大学院への出願に向けた準備をしていきたい。

オンライン上でのアプリケーションフォーマットを今日中に全て完成させようと思う。すでに八割ほど記入や提出書類のアップロードが済んでおり、今日は残りの二割を完成させる。年内に新たな協働プロジェクトが三つほど始まる可能性があり、その情報を反映させたいため、提出書類の中で重要なCVについてはまた後ほど最終版にする。出願の締め切りは一月の最初の週の金曜日であるため、随分と時間的なゆとりがある。

数日前の日記で書き留めていたように、志望動機書についてはネイティブの友人からフィードバックをもらい、それをすでに反映させ、最終版とすることができた。もちろん、提出前に再度文章全体を読み直すが、志望動機書が無事に完成したことは大きいだろう。本日完成させるオンラインアプリー

ケションも、提出までにもう何回か見直すことになるだろう。納得のいく形で今回の出願をすることができそうだ。

早朝に、バッハの四声のコラールに範を求めて作曲実践をした。バッハのコラールを参考にして曲を作ることは、小さな詰将棋の問題を一つ解くことと非常に似ていると改めて思った。一日の活動を本格的に始める前に、こうした実践を行うことは良いリズムを生み出す。俳句や短歌のように、短い文章表現の中に一つの創造的な世界を生み出すことができるのと同様に、短い曲の中にも創造的な世界を生み出すことは可能だろう。

ショートショートを通じて、一つの小説空間を構築することが可能なのであるから、短い曲が一つの音楽空間を作ることも可能だろうし、自分が行いたいのはまさにそうしたことである。小さいものの中に無限を体現するような曲を作っていくことができればと思う。

今、書斎の中には、昨日出会ったロシアの作曲家ニコライ・メトネルの曲が流れている。今日も、この五時間にわたるピアノ曲全集を聴き続けていく。メトネルの曲に耳を傾けていると、将来はヨーロッパ各地を数年おきに転居し、その土地にゆかりのある作曲家の曲を参考にして本格的に曲を作っていきたいと思った。ロシアにもぜひ一度足を運んでみたいと思う。フローニンゲン：2018/11/13（火）10:03

No.1408: Warmth in Early Winter

Fortunately, today will be sunny all day long. Although the temperature in Groningen is getting colder and colder, I can feel warmth inside myself. Groningen, 08:51, Wednesday, 11/14/2018

3393. 太陽が見え始めた頃に

天気予報の通りに晴れ間が広がり始めた。早朝には雨がぱらつくこともあったが、今は太陽の光がフローニンゲンの街に差し込み始めている。

つい先ほど昼食を摂り終えた。昼食を摂っている最中は、徐々に晴れ渡る空をずっと眺めており、空の表情の変化に合わせて、自分の内側の世界も表情が変わっていくかのようであった。ここ数日

間は太陽の光を見なかったので、久しぶりに太陽の光を拝むことができて嬉しく思う。幸いにも明日以降も晴れの日が続くようである。

今日はこれから、過去の日記を編集し、その後に仮眠を取る。仮眠後には、バッハの変奏曲に範を求めて作曲実践をする。バッハの変奏曲を一つ一つ参考にしていくと、そこに体現されているバッハの音楽世界の魅力にいつも引き込まれていく。変奏曲はどれも、楽譜の外見上は複雑ではないのだが、そこで創造されている音楽世界においては一つ一つの音が複雑な組み合わせを成しており、それが一つの調和のある音楽空間を形作っている。こうした音楽空間をいかようにして創出することができるのかというのは、自分にとって永遠の課題になるかもしれない。

早朝に、過去に作った曲を編集していた時、そこではペダルなど用いられていなかったのだが、ペダルを用いた方が望ましいように思えたので、ペダルの機能を曲に付加してみたところ、響きがとても良くなったように感じた。ペダルの使い方は難しいが、うまくそれが使えた時の響きは本当に素晴らしい。音が持つ響きには今後も着目し続けていきたい。音の広がり方はどこか、波紋の広がりを想起させるものがある。諸々の意味で響く曲。内面的にも、外面的にも響きのある曲を作っていきたい。

仮眠後にバッハの変奏曲に範を求めたら、ゆったりとした気分の中で、大学院に出願するオンラインアプリーケションを完成させていきたいと思う。時間にして一時間か一時間半ぐらいをかければ、残り二割の記入が終わるだろう。それがひと段落したら、夕食までの間は、シュタイナーの思想やシュタイナー教育に関する書籍を読んでいく。自分の関心の赴くままに、読みたいと思う書籍の中の、読みたいと思う箇所を中心に読書を行っていく。

太陽の光りが出始めたこともあってか、自分の気分がさらに明るくなっていることに気づく。フローニンゲン：2018/11/13（火）12:52

No.1409: A Borderline Between Sanity and Insanity

When I was walking down a street in San Francisco (perhaps, Fillmore Street) six years ago, I realized that a borderline between sanity and insanity was vague. I just recollected such a memory. Groningen, 16:22, Wednesday, 11/14/2018

3394. 夜空に浮かぶ三日月を眺めながら

時刻は午後の七時半を迎えた。夜空に三日月が浮かんでいるのが見える。

数時間前に遡ると、今日は晴れた夕方の空を眺めることができた。数羽の鳥が夕暮れ時の空を舞っていた姿を思い出す。光の波が冒険を終えて、彼らは自分たちの家に帰ろうとしているかのような雰囲気が、夕方のフローニンゲンに漂っていた。明日もまた、光の波は冒険に出かけていくだろう。

今日は計画通り、夕方に、大学院の出願に関するオンラインアプリーケションを完成させた。一時間ほどそれに取り組み、あとはCVを最新版にすることと、最終確認をした志望動機書をアップロードすれば良いだけとなった。アプリケーションの画面を見ると、推薦状を依頼したうちの一人である、マイラ・マスカレノ教授が午後に推薦状を提出してくださったという情報が表示されていた。それを見て、すぐにお礼のメールを送っておいた。

一週間ほど前に、すでにサスキア・クネン教授も推薦状を提出してくださっており、あとはルート・ハータイ教授からの推薦状を待つだけとなった。大学院への出願の締め切りは、来年の一月初旬だが、来月の半ばには出願を済ませることができるだろう。新たな協働プロジェクトが始まることを考えると、時間的な余裕を持って提出を済ませておきたい。

今日は午前中に、武満徹に関する書籍を読み、午後にはシュタイナー教育に関する書籍を少しばかり読んだ。明日はシュタイナー教育に関する書籍を読むことに加えて、もう一度、マーク・フォーマン博士の“A Guide to Integral Psychotherapy: Complexity, Integration, and Spirituality in Practice (2010)”を読もうと思う。

ちょうど先日に行われた、協働者の方たちとのミーティングの中で、ロバート・キーガンの発達モデルで言うところの発達段階5が持つ限界について話題となった。その点についてこちらから二、三紹介したが、改めて段階5の限界について考えてみたいという気持ちになった。さらには、本書で紹介されているように、発達段階5.5、6の特徴及びそれぞれの段階の限界について再度確認をしておこうと思う。本書を参考にして、それらの点についてまとめておこうと思う。

ケン・ウィルバーの最新刊である“The Religion of Tomorrow (2017)”においては、発達段階8まで言語化されているのだが、それらの段階の特性を知的に理解することはなかなか難しいため、明日は段階6までの理解を深めていくことに留める。段階5.5と6が持つ固有の価値は何であり、固有の精神病理や構造的な限界は何かについて考えをまとめておこうと思う。

今日はこれから、本日最後の作曲実践を行う。その際には、ハイドンに範を求める。当初の予定では、テレマンに範を求める予定であったが、その計画は明日に回す。明日もまた、探究活動と創造活動に納得いくまで従事する一日となるだろう。フローニンゲン:2018/11/13(火)19:41

3395. 今朝方の夢

今朝は六時前に起床し、六時半から一日の活動を開始した。天気予報を確認すると、今日から一週間は晴れの日が続く。だが、本日より気温が下がっており、来週の今頃は、最低気温がマイナスとなるようだ。ついに冬が本格的にやってきたようだ。最低気温のみならず、最高気温がマイナスになる日もそう遠くないだろう。

今朝方の夢について少しばかり振り返っている。夢の中で私は、とてもモダンな造りをしている高校にいた。どうやらそこで私は、教師の仕事に従事しているようだった。私は校舎の中のある会議室にいて、そこで他の教師三名とミーティングを行っていた。具体的には、生徒たちを指導する若い教師たちの成長を支援するにはどうしたらいいか、ということを議題として取り上げていた。成人発達理論の理論的な枠組みを活用することや、コーチングの技法を活用することなどを話題として取り上げ、それらについてお互いの意見交換をしていた。

会議の最後の方で、これまでの話の総括として、私の方からコメントを述べた。その内容はとても専門的なものだったのだが、私はできるだけわかりやすく他の教師たちにそれを伝えた。すると、三名の教師たちは黙ったままであったが、三人とも何か重要なことを理解したようであり、納得の表情を浮かべていた。そこで会議が終わった。

会議を終えた頃には昼食の時間になっていたから、私は校舎の中にある小さなスーパーに行って昼食を購入しようと思った。校舎の中を歩いていると、そういえば先ほど話をしていた教師の一人が、ある教室に絵画を掛けに行くと述べていたことを思い出した。

時間に余裕があったので、その教室に立ち寄って、その絵画を見ようと思った。目的の教室に近づくと、大工さんを含めて、建築関係の作業員たちが何名かいた。

教室に到着し、壁を眺めると、どうやらまだ絵画は飾られていないようだった。すると後ろから、「あっ、お願いしておいた絵画がまだ飾られていないじゃないか」と、先ほど一緒に会議をしていた教師が述べた。その教師の地位はかなり高く、先ほど若い教師に絵画を掛けることをお願いしていたようだ。その経験豊富な教師の顔を見ると、「やれやれ」といった表情を浮かべている。

絵画作品を期待していただけに、私も残念であったが、またいつでも見れるだろうと思い、昼食を買いに再び廊下を歩き始めた。すると私は、誰かに後ろから背中をそっと突かれた。振り返ってみると、チューターとして雇われている若い大学生の女性だった。昼食を一緒に買いに行きたいということなので、私たちは目的のスーパーまで雑談をしながら一緒に歩いた。

実は、校舎の中にはスーパーがいくつかあり、彼女は別のスーパーでしか買えないパンがあるらしく、私たちは挨拶をして途中で別れた。私はスーパーで素早く食べ物を購入し、元来た道とは違う道を歩いてオフィスに戻った。

オフィスのある建物の一階から、教師たちの仕事部屋がある五階に向かうために、エレベーターに乗ろうとした。すると、二つのエレベーターのうち、一方のエレベーターに、小中学校時代の友人の女性たちが何人かいることに気づいた。彼女たちも五階に向かうとしていることがわかった時、二つのエレベーターが同時に一階に到着し、ドアが開いた。すると突然、私が乗ろうとしていたエレベーターに、小中学校時代の親友が飛び乗ってきた。

親友:「ふぅ〜、危ない危ない。なんとか間に合った」

私:「ギリギリセーフやね」

親友:「ほんまやね。あっちのエレベーターよりもこっちの方が早そうやったから、乗れてよかったっちゃ」

私:「実はエレベーターに飛び乗ってくる姿がちらっと見えとったけぇ、扉を閉めるボタンを急いで押しとったんよね笑」

親友:「わやしかせん！笑　ほんまじゃ〜、焦って15階のボタン押しとるやん」

私:「えっ？」

確認すると、エレベーターの押しボタンは1階、5階、15階の三つしかなく、そのうちの15階を私は押しているようだった。エレベーターはすぐに15階に到着し、そこで夢の場面が変わった。フローニンゲン:2018/11/14(水)07:04

No.1410: A Restful Wall

I'll end all of my today's activities, feeling as if I were leaning against a "restful" wall. Groningen, 20:27, Wednesday, 11/14/2018

3396. 今朝方の夢の続き

時刻は午前七時を迎えた。この時間帯のフローニンゲンはまだ闇に包まれている。もう30分ほどしたら、徐々に闇が晴れてくるだろう。今日は天気が良いようなので、昼食前に近所のスーパーに買い物に行きたいと思う。

昨夜ふと、現在毎日のデッサンに用いている色鉛筆が水彩のものなので、近々絵筆を購入し、これまで描いてきたデッサンに水を含ませてみたくなった。昨日、シュタイナー教育に関する書籍を読んでいた時に、シュタイナー教育では水彩画を描く実践があり、実際の作品をいくつか見ている時に、自分も水彩画を描きたくなった。絵の具を使うと色々面倒だと思ったので、水彩の色鉛筆で描いた絵に水を含ませていくための絵筆を購入しようと思い立った。

今日は街の中心部に行く用事がないが、明日か明後日には行きつけのチーズ屋に立ち寄ろうと思っていたので、その時にチーズ屋の近くにある文房具屋に足を運ぼうと思う。作曲ノートを見返してみると、159曲目以降、作った曲から喚起される感覚を色鉛筆で絵として表現していたため、およそ450ほどの小さな絵を描いてきたことになる。実際には、作曲ノートではなく、普段の学術研究用のノー

トにもいくつか絵を描いていたため、数としてはもう少し多いものになる。いずれにせよ、これまで描いてきた絵に水を含ませることによって、どのような変貌を遂げるのかがとても楽しみだ。色使いがより鮮やかなものになるであろうことを期待する。

今朝方の夢について再度振り返っていると、先ほど書き留めた夢の続きの場面について思い出した。次の夢の場面では、私は小学校時代の校庭にいた。そこには全校生徒が集まっており、なにやら運動会の練習をしているようだった。全校生徒がいくつかの列に並んでいる時、どうも私は一つの列に並ぶことが嫌だったので、列からはみ出し、右に自分だけの新しい列を作ろうと思った。

そこに並んでいるのは私だけであり、それに気づいた先生が私に話しかけてきた。先生は特に怒っている様子もなく、ひとことふたこと、私に何かを述べた。それを聞いた時、運動会でどうやら自分は重要な役割を担っていることがわかった。先生の話している事柄の意味は理解できたが、自分の列を新たに作ったことに私は満足せず、運動会よりも他にやりたいことがあったので、全校生徒が整列している様子を脇目に、私はその場を後にすることにした。

どんな役割か定かではないが、運動会の進行に私の存在はカギを握っているようだったのだが、運動会の存在意義そのものが私にとっては疑問であったため、私は自分のやりたいことを優先するために、その場から静かに立ち去った。

全校生徒の視線や先生たちの視線を背中に感じながらも、巨視的な観点で見ると、運動会に参加するよりも、自分がやりたいことを優先することの方が、その場にいる全員のためでもあると私は思っていた。しかし、それを説明しても誰も理解できないだろうと思っていたこともあり、私は黙ってその場を後にした。

ゆっくりと校庭から去って行こうとすると、先生が「追いかけて！」と、何人かの生徒に対して叫ぶ声が聞こえた。その声が聞こえた時、私は宙に浮き上がり、追ってきた生徒たちの手の届かない場所に避難した。避難した場所は、この現実世界に錯綜的に存在している複数の時間が入れ子構造になったものだった。それは、白い光の束の構築物として宙に浮かんでいた。

私はその構築物のてっぺんから、地上の様子を眺めていた。私を追ってきた生徒たちは、地上で私のことを探しているようだった。その様子をしばらく眺めながら考え事をしていると、追ってきた友

人たちとは少しだけ会話をしてもいいように思えた。そのため私は、時間が入れ子構造になった白い光の束の構築物から降りていく決心をした。地上に降り、私の姿が見えた友人たちは嬉しそうな表情を浮かべており、私もそれを見て嬉しくなった。

今朝方はそのような夢も見ていた。今朝方の夢に限ったことではないが、私が見る夢の多くは、小中高時代の何かしらの記憶と紐付いている。夢の中に登場する人物の多くは、小中高時代の友人であることにも気づく。それらの時代に見たこと・体験したことの影響が途轍もなく大きいことに気づかされる。そこで作られた記憶、さらにはそこで作られた自己のいくつかの側面とは、今後も夢を通して向き合っていく必要があるだろう。それらと向き合っていくことは、今後長く続く実践になりそうだ。
フローニンゲン:2018/11/14(水)07:36

No.1411: Skin of Morning Light

Peaceful morning light is shining on the city of Groningen. It is very tender and radiant.
Groningen, 08:46, Thursday, 11/15/2018

3397. シュタイナー教育における芸術実践およびエマニュエル・シャブリエ

白く薄い雲が空を覆っており、太陽の光りが優しく地上に降り注いでいる。幸いにも今日は、一日を通して晴れるとのことであり、今日から一週間は晴天の日が続く。確かに気温は低くなってきたが、心象風景の中に温かみを感じられる今日この頃である。

早朝に作曲実践を行い、そこからはシュタイナー教育に関する書籍を読んでいた。過去に読んだ三冊の書籍を読み返し、新たな気づきをもたらす箇所に下線を引いたり、書籍に書き込みを行っていたりした。

シュタイナー教育の水彩画の実践と、ユーリズミー(オイリュトミー)という身体芸術実践は改めて興味深いと思った。特に、水彩画に関しては、一冊の書籍の中に、生徒が実際に製作した絵がいくつか掲載されており、その色使いの鮮やかさには随分と驚かされた。小学校に入りたての子供たちが描いた絵の中に、感銘を受ける色使いをしているものが多くあった。

世界には他にもいくつか優れた教育手法があるが、実際に今の自分が受けてみたいと思うような教育実践を施しているのはシュタイナー教育ぐらいしかないように思う。文字どおり、今の年齢でもう一度小学校からやり直すことを仮定するなら、シュタイナー教育以外の教育を受けることは気が進まない。

シュタイナーは、人間発達に関して、水平的・垂直的な両側面を洞察深く捉えていた。そうした洞察が、教育プログラムの中に体現されていることを改めて思う。包括的な人間教育ということを考えた場合、シュタイナー教育の持つ価値が際立ってくるように思う。引き続きシュタイナー教育について理解を深めていこうと思う。

今日はこれから、少しばかり作曲実践を行う。昼食までに一曲を作ることは難しいだろうから、作れるところまで作るようにする。

昨夜、ふとソファーの上に積み上げられている楽譜から、エマニュエル・シャブリエの楽譜を手に取った。この楽譜は、今年の六月にロンドンを訪れた際に購入したものである。

シャブリエは公務員生活を長く続け、その傍らフォーレなどの作曲家と親交を持ち、独学で作曲の勉強を行っていたことを思い出した。音楽学校に通った経歴がないという点、作曲を独学で学び、作曲実践を始めたのは成人以降であったことなどが、シャブリエに関心を持った理由として挙げられるかもしれない。昨夜の時点で、どの曲を参考にするかを決めていたので、今から買い物に出かけるまでの時間を使って、作曲実践を少々行いたい。フローニンゲン：2018/11/14（水）11:19

No.1412: Light Waves of Dusk

It became dark in the evening when I realized it. I'm feeling as if I were always swimming in constant light waves. Groningen, 16:12, Thursday, 11/15/2018

3398. 夕方の絶景：GDPと精神病理

時刻は午後の五時半を迎えた。今から一時間前から五時までの間、夕日の絶景がフローニンゲンの空に広がっていた。30分を超す間、自然が生み出す美を味わっていた。晴れの日の夕方には、こうした素晴らしい夕暮れ時の空を味わうことができるがフローニンゲンの良さだ。

空に雲がない時の夕日よりも、少しばかり雲がある時の方がその美しさは増すように思う。というのも、夕日が雲に照らされることによって、なんとも言えない美を生み出すからである。明日も同様の時刻を迎えたら、書斎の窓に近寄って、夕暮れ時の空をゆっくりと眺めようと思う。

今日は昼食前に、エマニュエル・シャブリエに範を求めて曲を作り始めた。36小節の短い曲を参考にしていたのだが、思っていた以上に一曲作るのに時間がかかった。その曲を作りながら、今から六年前に、サンフランシスコの坂道（おそらくフィルモアストリート）を下っていた時、突如として、正気と狂気の境目は薄皮一枚ほどの厚さしかないことに気づいたことを思い出した。

薄皮一枚を隔てた正気と狂気さの双方が、私たちの内側には絶えず渦巻いている。そして、私たちが反対側の極に行くことは極めてたやすく生じる。そんなことを考えていた。

今日は結局、マーク・フォーマン博士の書籍を参考にして、発達段階5、5.5、6の三つの段階の特性について文章をまとめることをしなかった。今夜もそれに取り掛かる気は無いので、明日にでもそれを行いたいと思う。書きたいと思った時にそれを書けばいい。それらの記述を読みたいと思わなければ読まなければいいし、書きたいと思わない時には書かなければいい。全てを自分の内側の内発動機に委ねようと思う。

夕日の美しさを眺めていた時、オランダという国の持つ落ち着きに対して、心が安らかになった。こうした安らかさをもたらす国で今後も生活をしていきたいと思う。

来年はアメリカの大学院に進学するか、スイスで生活をすることになる。アメリカにも落ち着いた場所があるのは知っているが、国全体の諸々の事柄を考えてみると、正直なところ自分にとっては、アメリカはあまり住むのに適した場所ではないと思う。このようなことを述べていると、アメリカに長く捕まる可能性があるのだが、仮に来年アメリカで生活を営むことになったとしても、生活をするのは数年ほどに留めたい。

ふと、自分はGDPの上位の国の生活環境があまり良くないと感じているようだ、ということに気づいた。確かに、物質的に恵まれた面があったとしても、GDP上位の国は、どこか精神的に異常なものが漂っているのを感じる。多くの国はGDPを上げることに躍起になっているかもしれず、上位の国は自国のGDPをさらに高めることに躍起になっているかもしれないが、それはとても馬鹿げた事柄のよ

うに思える。GDPの数値は、その国の集合的な精神病理と少なからぬ正の相関があるのではないかと思ってしまう。

改めてGDPのランキングを調べてみたが、上位の国は軒並み、そこで生活をしたくないと思う国ばかりであった。GDPの増大が自国の精神病理を増大させることにつながるのであれば、GDPとは一体何の指標であり、なぜそんなものを増大させることに躍起になっている人たちがいるのか不思議に思う。フローニンゲン：2018/11/14（水）17:46

【追記】

上記の日記を読み終えてふと、GDPは、“Gross Domestic Product（国内総生産）”の略称であることに加えて、“Gross Domesticated People”の略称でもあるのではないかと思った。後者の言葉を訳すならば、「総家畜化人間（家畜化された人間の総数）」になるだろう。GDPの上位の国が軒並み不気味な雰囲気をまとっているのは、家畜化された人間が数多くいるからなのかもしれない。フローニンゲン：2019/1/31（木）20:48

3399. クルーズ客船と列車に乗る夢

今朝は六時過ぎに起床した。今日もまた晴天となるようだが、今夜から最低気温がぐっと冷え込む。今日の最低気温は0度とのことである。今日から一週間は晴れの日が続くようであり、明日も晴れとのことであるから、明日は街の中心部に散歩がてら買い物に出かけたい。

ここ数日間、ほぼ毎日夢を見ているように思う。今朝方もいくつか夢を見ていた。一つ印象に残っている夢としては、私が欧米人たちの何かしらのグループに所属しており、比較的大きいクルーズ船に乗っていたことだ。彼らはおそらくアメリカ人だと思うが、彼らとは日本語で会話をしていたように思う。

肌や性別、そして年齢が異なる10人ぐらいのアメリカ人と一緒に、私はクルーズ船の上で会話をしていた。実は、10人のうち、その半分は何かしらの犯罪グループに所属している者たちであった。私たちはニューヨークから出発し、近くの孤島を訪れた後、再びニューヨークに戻っている最中だっ

た。クルーズ船の進行は途中まで順調だったのだが、あるところで、犯罪グループに所属する半分の乗客が船の乗っ取りを始めた。

彼らは武器を持っていないようだったが、残りの乗客を脅し、自分たちに従うように指示をしていた。私はその様子を傍で眺めていた。犯罪グループのメンバーたちは、どうも私には何も危害を加える様子はなく、むしろ同じグループに所属している仲間だと見なしているかのようであった。

彼らは出発地のニューヨークに戻るのではなく、別の都市に行こうとしているようだった。だが、それが失敗に終わったのか、しばらくすると、ニューヨークの姿が遠くの方に見え始めた。それを見ていた他の乗客たちは安堵の表情を浮かべていた。特に、一人のCEOの男性は歓喜に沸き、嬉しさを表現するかのように何かを叫んでいた。

ニューヨークの船着場が近づくと、そこには多数の警官が待ち構えており、犯罪グループのメンバーを捕まえようとしていた。その事態をあらかじめ予想していたかのように、船着場の近くに列車に乗れる停泊地があり、犯罪グループのメンバーたちは全員そこで降り、列車に乗り込もうとした。なぜか私もそこで降り、彼らと一緒に列車に乗ることにした。列車がやってくる場所にも何人かの警官がいて、犯罪グループのメンバーたちは警官に気づかれないように、素早く駅のプラットホームへと向かった。

エスカレーターを駆け足で降りた時、そこで見た光景は、カリフォルニアのバークレー近郊の駅に似ていると私は思った。そうした記憶が想起されながらも、それを特に気にかけることなく、私は改札を通り抜けようとした。

改札の付近にも警官がいたのだが、メンバーは平静を装い、見事に警官たちを出し抜き、改札の向こう側へと出て行った。一人の女性メンバーが少しもたついていたが、私は彼女を助けるように一緒に改札を抜けた。そこからは各自が目的とする場所に向かうために、別々の列車に乗った。私が乗った列車は「サンフランシスコ行き」という表示が出ていた。

先ほどまではニューヨークにいたはずなのだが、その場の感覚はやはり西海岸にいるかのようであった。その列車に乗ると、すぐに出発した。列車の中にはちらほら人がいるだけで、閑散としている。一方で、窓の外から差し込む太陽の光はとても暖かかった。

© YOHEI KATO 2018

私は、一緒に改札を抜けた黒人女性と共にこの列車に乗り込んでいた。列車に乗り込むと、そこで別れ、お互いが好きな席を探し始めた。列車の中をしばらく歩いていると、そこで日本人の顔を見かけた。見ると、予備校時代の寮の隣の部屋にいた友人であることに気づいた。

私はまさかこんなところで彼に会えるとは思っていなかったので、嬉しくなり、すかさず声をかけた。すると、彼は私の顔を見て、少し驚いているようだった。久しぶりの再会を驚いているのではなく、見ず知らずの他人に突然話しかけられたというような驚きであった。自分の名前を名乗ってみたが、彼はすぐに思い出せないようであった。

お互いに苦笑いを浮かべながら、二、三言葉を交わしたところで別れた。その後私は、窓の外に向かって腰掛けられる丸椅子の一つに座ることにし、太陽の光を浴びながらぼんやりしていた。フローニンゲン:2018/11/15(木)07:16

No.1413: A Winter Knock

Although tomorrow will be also fine, the temperature will become low. I can hear a winter knock.
Groningen, 20:35, Thursday, 11/15/2018

3400. 夢の振り返りと今日の活動計画

午前七時を過ぎると、空が闇からダークブルーに変わり始めた。もう30分ほどすれば、闇は完全に晴れ、光の世界がやってくるだろう。

早いもので、気がつけば11月もちょうど折り返しの時期になった。天気予報を確認すると、来週からは気温がぐっと冷え込み、最高気温は5度前後、最低気温はマイナスになる日もあるようだ。

今朝方の夢について先ほど書き留めていたが、夢の中で乗った列車は、カリフォルニアのベイエリアを走るBartだったと思う。また、列車に乗り込んだ駅は、夢の中の自分が感じていたように、やはりバークレー近郊の駅であった。エスカレーターを降りている時の雰囲気と、降りた後に広がる光景がそれを確信させていた。

夢の中ではあまり考えてもみなかったのだが、その駅で別れたメンバーたちは皆どのような場所に向かって行ったのだろうか？また、同じ列車に乗った黒人女性はどこに向かったのだろうか？彼らの行き先について少しばかり思いを巡らせている自分がいる。確かに彼らは犯罪グループに所属していたが、彼らは決して悪人のようには思われなかった。社会や他者に危害を加えることは一切なく、彼らの活動はどこか社会正義の実現とつながっているのだが、この社会の法律ではそれは悪だと見なされているかのようにすら思えた。

ここ数日間毎日夢を見ており、昨夜は就寝前に、「今夜はどのような夢を見るだろうか？」と自分に問いかけをしながら就寝に向かっていたことを思い出す。もしかしたら、意識上におけるそうした問いかけが、夢の世界へメッセージとして届き、今朝方のような夢を見たのかもしれない。今夜も同じことをしてみようと思う。

今日はいつもと同じように、作曲実践を旺盛に進めていく。いや、今日はいつも以上に作曲実践に時間を充てたいと思う。創作意欲のようなものが強く湧いている自分に気づく。今日の作曲実践は、バッハの四声のコラール、バッハの変奏曲、テレマンの曲、ハイドンの変奏曲を順番に参考にしていこうと思う。合計で四曲ほど作ろうと思う。そうした作曲実践に並行して、今日は久しぶりに、発達心理学の始祖であるジェームズ・マーク・ボールドウィンの全集“Selected Works of James Mark Baldwin (2001)”を読み返す予定だ。全六巻のうち、今日は第一巻と第二巻を読む。その後、これまた久しぶりに発達心理学のテキストである“Theories of Developmental Pscyhology, Fourth Edition (2002)”を読み返そうと思う。本書は、学部や大学院で用いる標準的なテキストであり、発達心理学の理論を学ぶ上では情報量も多く、良書だと思う。

500ページほどの分量があるため、最初から最後までを読み返すのではなく、改めて目次を眺めて関心を持った箇所、特に現代の発達心理学における雑多な理論が収められた第八章を中心に読み返していこうと思う。本日の活動計画を書き留めたところで、辺りが明るくなった。これから本日の活動を本格的に始めていく。フローニンゲン：2018/11/15（木）07:39

No.1414: A Morning Adventure

I’m looking at the misty world. This morning encourages me to have an adventure.　Groningen, 08:09, Friday, 11/16/2018